

同志社女子大学生活科学 Vol. 45, 64~68 (2011)

〈資 料〉

「涼宮ハルヒの憂鬱」が描く青年の妄想的な世界－入門篇－

Adolescent's Delusional World depicted by "The Melancholy of Haruhi Suzumiya": Introduction

諸 井 克 英
(Katsuhide MOROI)

はじめに

本稿は、ライトノベルとして格段の成功を極めた「涼宮ハルヒの憂鬱〈シリーズ〉」を文化消費として捉え、この消費を支える心理的メカニズムの一端に触れることにより、「涼宮ハルヒ」現象の学術的対象化を試みる。「涼宮ハルヒの憂鬱〈シリーズ〉」の原点であるライトノベルとは、文学小説の亜流ではなく、他メディアとの相乗作用を孕みながら、若年層を中心に生まれた文化現象である。つまり、「涼宮ハルヒの憂鬱〈シリーズ〉」は、ライトノベルという小説形式メディアに留まらず、テレビ・アニメや映画・アニメ（DVD化も含め）、コミック、キャラクター商品、音楽CD（声優によるライブ・パフォーマンス）、ゲームなどにまたがる、複合メディア化された現象なのだ。

「涼宮ハルヒの憂鬱」登場の背景

一柳（2009）によれば、ライトノベルとは「マンガ的・アニメ的なイラストが添付された、十代の若者層を主要読者とするエンターテインメント小説」である。このライトノベルの歴史は'70年代の少年・少女向け文庫の創刊（「秋元文庫」, 「ソノラマ文庫」, 「コバルト文庫」など）に始まる長い歴史をもつ（日経BP, 2004）。先の一柳の指摘を詳述すると、次のような特徴を備えている。①10代を購買層として意識した、エンターテインメント小説、②口語表現、③表紙や挿絵などイラストを多用、④小説外（マンガ、アニメ、ゲームなど）メディアの影響、⑤読者と同一目線（日経BP, 2004）。

今やわが国の若年層文化の一角を占めるに至ったライトノベル現象は、近年進行している「読書離れ」（毎日新聞社, 2011；全国出版協会・出版科学研究所, 2011参照）やその対策としての「国民読書年推進会議」の設置（http://www.mojikatsuji.or.jp/link_5dokushonen 2010.

同志社女子大学生活科学部

html)を嘲笑するかのようである。さらに、ライトノベルによる語りは、「社会変革の意志（とその挫折）」というイデオロギー化した戦後の日本児童文学（井上, 2009）の伝統を超越してしまったのだ。

ところで、宇野（2008）によれば、'90年代のわが国の「バブル経済の崩壊」と世界的な「冷戦の終結」により、我々は「自由だが冷たい（わかりにくい）社会に直面する」。つまり、①「モノはあっても物語のない世界、つまらない」という絶望や、②「引きこもり／心理主義」的傾向を若者の心性が帯びることになる。その中で、「主人公と恋愛相手の小さく感情的な人間関係（『きみとぼく』）」を『世界の危機』『この世の終わり』といった大きな存在論的な物語に直結させる想像力」を物象化させた「セカイ系」が出現する。この「セカイ系」概念を検討した前島（2010）によると、次の特徴をもつ。①少女（きみ）と少年（ぼく）の恋愛が世界の運命に直結する、②少女のみが戦い、少年は戦場から疎外されている、③社会の描写が排除されている。

前島はこの定義の曖昧さを確認した上で、「コミュニケーションとしての作品消費」という新たなパラダイムに向かう。これは、『けいおん!』（かきふらい, 2008-2010）などに代表される「日常系」の流れである。この流れでは、「努力による成長や、衝突・葛藤のプロセス描写が最小限に抑えられ」「“萌え”を感じさせる美少女キャラクターによる日常生活」が描かれる（キネマ旬報映画総合研究所（編）, 2011）。

「涼宮ハルヒの憂鬱〈シリーズ〉」は、「セカイ系」の流れを継承しながらも、「部活仲間での草野球や夏合宿などのありふれた青春」（宇野, 2008）の享受が仕組まれており、「日常系」要素もふんだんに取り入れられている。女性の登場人物（涼宮に加え、とりわけ朝比奈や長門）に「萌え」的属性を付与し、男性2者（キョン、古泉）には腐女子現象（上野, 2007など）の匂いを意

識させながらそれを軽量化した関係性を添付するのだ。その点で、「涼宮ハルヒの憂鬱」には、「ごめんね、シウちゃん・・・あたし・・・こんな体になっちゃった・・・」（『最終兵器彼女』；高橋，2000-2001）と立ち尽くす「ちせ」がもつ「セカイ系」構造とは基本的に異なる枠組みが与えられている。

「涼宮ハルヒの憂鬱」の基本構造

「ただの人間には興味ありません。この中に宇宙人，未来人，異星人，超能力者がいたら，あたしのところに来なさい。以上」。入学した県立「北高校」のクラスで涼宮によって行われた，奇異な自己紹介から，ごく普通の男子高校生であるはずのキョンの高校生活は一変することになる（谷川，2003 a）。つまり，涼宮ハルヒを中心とした長大な物語に巻き込まれる。

涼宮は，飽き足りない高校生活の予兆に自ら SOS 団（世界を大いに盛り上げるための涼宮ハルヒの団）を結成する。この組織は，キョンの尽力により「学園生活での生徒の悩み相談，コンサルティング業務，地域奉仕活動への積極参加」を目的とする「生徒社会を応援する世界造りのための奉仕団体（同好会）」として生徒会の認定を受ける。この SOS 団結成を契機として，「普遍的な意味での一般人」（谷川，2007）であると古泉によって保証されるキョンは，この SOS 団が「自分の居場所」であり，「ハルヒという少女がかけがえのない存在だということを確認していく作業」を開始する（上田，2011）。

もともと文芸部の部室が SOS 団の居場所のために涼宮によって強引に占有される。かくして文芸部の唯一の部員であった長門有希が3人目の団員となる。長門は，「この銀河を統括する情報統合思念体によって造られた対有機生命体コンタクト用ヒューマノイド・インターフェース」であり，「涼宮ハルヒを観察して，入手した情報を統合思念体に報告する」ためにこの「北高校」にいるのだ。さらに，涼宮が無理矢理に入部させた2年生の朝比奈みくるは「この時代の人間」ではなく，「もっと，未来から」来た。「三年前，大きな時間震動が検出され」，その原因が涼宮にあるという設定である。

「中途半端な時期に転校してくる生徒は，もう高確率で謎の転校生なのよ！」という涼宮の断定に従って入部させられた古泉一樹も，「三年前のあの日，突然僕の身に超能力としか思えない力が芽生えた」超能力者で，「涼宮ハルヒの監視を最重要事項にして存在して」いる機関の一員なのだ。ここに至って，未来人，宇宙人，超能力者が，前述の涼宮の願望通り，SOS 団に偶然にも

そろうのである。

なぜ，キョンが涼宮とたまたま同じクラスとなり，涼宮と同じ中学であるクラスメイトから変人扱いされている涼宮とコミュニケーションを営み，結局ともに SOS 団を結成するのは一見涼宮の願望と矛盾する。しかし，涼宮とキョンの出会いは必然として仕組まれている。キョンは，朝比奈によって3年前の七夕に時間移動させられ，中学1年生の涼宮に遭遇する。涼宮は中学校の運動場に「織姫と彦星」宛てのメッセージを石灰で書くことを企図しており，キョンがそれを手助けする羽目になる。涼宮はキョンの「北高の制服」に気づくが，キョンは自ら「ジョン・スミス」と名乗る。つまり3年後の涼宮の「北高進学」とキョンに対する涼宮の一方的な意気投合がこの時点で予定されることになる。さらに，キョンの背中で「眠りこける少女」=朝比奈が涼宮により潜在的に認識され，3年後の SOS 団結成の際に朝比奈が涼宮の目にとまることになる（谷川，2004 a）。

涼宮を取り巻く4人の団員は，自分自身の特異性を自覚していない涼宮が現在の世界を自己破壊しないように奮闘する。つまり，涼宮が「自分の存在価値と能力を自覚してしまうと予測出来ない危険を生む可能性」があるからこそ涼宮の動静を監視し，現在の世界の安定を図らなければならない。古泉の具体的な説明によると，「次元断層の隙間」に「隔絶された，閉鎖空間」があり，「涼宮さんの精神が不安定になると，この空間が生まれ」，「青く光る巨人《神人》」が暴れ出し，この「閉鎖空間」に押し込めないといけない。つまり，「閉鎖空間」の発生につながる涼宮の「無意識的ストレス」を沈静化しないと現世界が崩壊するのだ（谷川，2003 a）。

ところで，「涼宮ハルヒの憂鬱（シリーズ）」では，例えば成長しない「のび太」とは異なり，涼宮は高校1年生として時間的に成長する。しかしながら，この物語の重大な時間点である涼宮の中学1年次への時間移動など「過去」への移動と「現在」への復帰という展開のため，あたかも「高校1年生」物語のような結果となる。典型は「エンドレスエイト」である（谷川，2004 c）。ここでは「八月十七日から三十一日の間」の異様な時間反復が起こる。「夏休みにやり残したことがある」という「識閻下」の涼宮の願望が永遠の時間ループを出現させる。その願望とは，夏休み終わりにキョンの家で夏休みの宿題をみんなでやることなのである。もちろん，涼宮はとっくに宿題を終えているのだ。このような形で，SOS 団所属5人を中心とした結構長めの涼宮「高校1年生」の青春が読者に消費される。

この読者の消費が頂点に達したところで、涼宮やキオンが2年生に進級する。このことは単なる学年進行ではなく、新たな物語構造の展開を引き起こす仕掛けとなる。つまり、「ルーティーンに介入してきた唯一のイレギュラー要素」であり「市外の私立に行った」はずの佐々木の登場である。佐々木は「おそらく十人中八人が一見して目を惹かれる、実に魅力的な女性」でありながら、男性言葉を発する。「涼宮さんが現在所持している力は、もともと佐々木さんに宿るはずのものだったと確信」する集団により、涼宮が支配する世界が危機に陥るのだ(谷川, 2007, 2011 a)。つまり、キオンは2年に進級して早々に「二つに分裂」した世界に同時並行的に存在することになる(α バージョン世界と β バージョン世界)。しかし、涼宮によって企図されたSOS 団入部試験に見事合格した渡橋ヤスミ(泰水, watahashi yasumizu)の活躍により結局はこの世界の「分裂」は解消される(谷川, 2011 b)。この新入団員ヤスミは「北高生」ではなく、涼宮の「無意識が実体化した姿」である(英文字を並び替えれば watahiha suzumiya)。これは、あたかも「宮下藤花」と「ブギーポップ」(上遠野, 1998)の「多重人格性障害」的關係を想起させるが、涼宮の場合には願望が物象化したのである。さらに、佐々木は、実は涼宮とは「小学校が同じ」であったことが明らかにされ、それまでは「涼宮ハルヒ」物語の時間枠組みは現時点から涼宮の中学1年生時点の範囲に収められていたが、小学生の時点にまで拡大される。

「涼宮ハルヒ」物語の基本構造は、彼女を取り巻く4人(キオンを除きそれぞれが涼宮の願望と一致した存在)が「青春」しながら(宇野, 2008)、中学1年生の七夕時に「神に選ばれた特殊な人間」である涼宮をその4人で守護するという骨組みから成る。さらに、『涼宮ハルヒの消失』(谷川, 2004 b)では、この枠組みにいわば強制的に巻き込まれた唯一の普通人であるキオンの願望通りに、涼宮に特殊な能力などなく「北高校」以外の高校に進学するという「世界を落ち着いた状態」に長門がいったん回帰させたにもかかわらず、キオンは涼宮SOS 団の世界を選択する。つまり、「セカイ系」を彷彿させる「涼宮ハルヒ」物語を実は当のキオン自身が望んでいたのだ。ここまでの単純な構造は、先述した2年次進級時点での佐々木=もう一人の「涼宮」の登場によって複雑化していく。

文化テキストとしての「涼宮ハルヒの憂鬱」

先述したように、「涼宮ハルヒの憂鬱〈シリーズ〉」は複合メディア化された文化現象として捉えることができ

る。東(2011)が仮定するように「九〇年代の文化消費者は、いつも郵便的の不安に取り憑かれている」ならば、「涼宮ハルヒの憂鬱〈シリーズ〉」が構成した世界はこの不安を読書行為の中でうまく想像上の解除をしてくれるのだ。我々は、当該作品(群)が消費者によって受容される心理学的機制を解析すべきであり、それは東が志向するように「アカデミズムとジャーナリズムへの激しい二極化」の克服でなければならない。ここでは心理学の枠組みから「涼宮ハルヒの憂鬱〈シリーズ〉」受容の心理学的機制を若干示唆しよう。

「北高校」という舞台やSOS 団部室の中でいわば実社会を捨象した物語展開は、子どもから大人への過渡期という曖昧模倣とした生涯発達上の位置における自己不安定感(諸井, 2002)への対処として居場所確保による安心感獲得の構造を生み出す。藤竹(2000)によれば、居場所とは、次の3つに分類される。①社会的居場所(他者による自己承認、自分の資質や能力の社会的発揮)、②人間的居場所(自分自身の確認、安らぎ感覚)、③匿名的场所(匿名的な状況下での自己存在感の回復)。SOS 団部室は明らかに①と②の機能を果たしており、これは、「現代視覚文化研究会」に集うオタク系大学生を描いた『げんしけん』(木尾, 2002-2006)と同等である。前者では前述した世界崩壊危機の枠組みが重ねられるが、後者の場合にはいわばオタクたちの日常が淡々と描かれる。このSOS 団部室を中心として、種々の属性を付与された人物のコミュニケーションが展開される。このコミュニケーションを読者が消費するのだ。

さらに、このコミュニケーションの様には、キオンを中心とした異性感情が織り込まれる。萌え属性満開の朝比奈、一見冷静沈着な長門、独裁者の如きであるが「えらい美人」の涼宮、これらの女性陣は結局のところ、キオンへの肯定的な異性感情を推察させる。この物語の特徴として、キオンの妹以外、涼宮やキオンの家族は登場しないことも指摘できる。つまり、あたかも閉鎖された学園生活を送っているかの如きである。しかしながら、2年次進級とともに起きた、前述した「分裂した世界」への対応の中で、「ハルヒの手料理」が「うまい」ことが分かり、涼宮自身が「母親は働きに出ているから」「晩ご飯の半分はあたしが作ってるわ」と告白する。共稼ぎ家族なのかあるいはシングル・マザーなのかは不明であるが、「人知れず憂鬱に沈み、自分自身でそれを対処しようとするハルヒ」(上田, 2011)の孤独を感じ取らせる告白である。さらに、先述した佐々木派の未来人・藤原が朝比奈を「姉さん」と呼ぶに至り、「失われた過

去」(谷川, 2011 b)として家族トラウマ的余韻を残す。つまり、具体的な家族関係を描かないことで若者の自己中心世界を描く手法は、家族トラウマに彩られた「ブギーポップ」の枠組みと対照的だが、家族関係の希薄化を前提にすると(諸井, 2003)実に興味深い。

おわりに

2003年に発刊された『涼宮ハルヒの憂鬱』は第8回スニーカー大賞(角川書店)を得、2011年に『涼宮ハルヒの驚愕(前・後)』まで合計11冊が出版され、ライトノベルの成功作品の代表といえる。この作品のアニメ化がライトノベル本の売り上げを逆流的に促進したにせよ(キネマ旬報映画総合研究所(編), 2011)、このライトノベルは多数の読者により消費されているのである。本稿では、物語展開としては未完である、この「涼宮ハルヒの憂鬱(シリーズ)」を対象に分析を試みた。作品自体の膨張がどのような結末となるかは、作品著者の意図にのみ依存するが、この作品では、日常世界の享受とそれからの逃避願望が錯綜する青年の心性が「キョン」に仮託されながら、「世界危機」とともに巧みに描かれている。この点で、この物語を消費する若者たちの心性を対象に精緻な心理学的分析を施すに値するといえよう。

さらに、涼宮ハルヒたちの居場所である「北高校」やSOS団が徘徊する地域は、ライトノベルでの記述がコミック化やアニメ化によってより視覚化され、「聖地巡礼」現象まで引き起こしている。「北高校」は西宮北高校、「光陽園駅」が甲陽園駅という具合である。他のアニメ・コミックなどでも発生している「聖地巡礼」(ドリルプロジェクト, 2010)は、「虚構を現実化し、現実を虚構化するメタフィクショナルな行為」(樋口, 2011)といえるが、「涼宮ハルヒ」の場合には「どこか映画のセットのような虚構性」を孕む阪急沿線ゆえの歴史文化的特徴が巧みに利用されているのだ。要は、この作品の消費者が存する地理的実世界との心理的交互作用をも含み込んだ分析も必要とされる。

引用文献

- 東 浩紀 2011『郵便的不安たちβ』河出文庫
 ドリルプロジェクト(編)2010『アニメ&コミック聖地巡礼 NAVI』飛鳥新社
 藤竹 暁 2000 居場所を考える 藤竹暁(編)『現代人の居場所〈現代のエスプリ別冊 生活文化シリーズ3〉』至文堂 47-57頁
 樋口ヒロユキ 2011 メタフィクションとしての聖地巡礼『ユリイカ7月臨時増刊号〈第43巻第7号〉』

- 号)総特集☆涼宮ハルヒのユリイカ!』青土社 225-232頁
 一柳廣孝 2009 はじめに 一柳廣孝・久米依子(編)『ライトノベル研究序説』青弓社 13-15頁
 井上乃武 2009 ライトノベルと児童文学の『あいだ』-『主体性』の問題をめぐって- 一柳廣孝・久米依子(編)『ライトノベル研究序説』青弓社 119-133頁
 上遠野浩平 1998『ブギーポップは笑わない』電撃文庫
 かきふらい 2008-2010『けいおん!①~④』芳文社
 キネマ旬報映画総合研究所(編) 2011『“日常系アニメ” ヒットの法則』キネ旬総研エンタメ叢書
 木尾士目 2002-2006『げんしけん①~⑨』講談社
 前島 賢 2010『セカイ系とは何か-ポスト・エヴァのオタク史-』ソフトバンク新書
 毎日新聞社 2011『2011年版読書世論調査-第64回読書世論調査/第56回学校読書調査-』毎日新聞社
 諸井克英 2002 成長する私 和田実・諸井克英著『青年心理学への誘い-漂流する若者たち-』ナカニシヤ出版 27-44頁
 諸井克英 2003『夫婦関係学への誘い-揺れ動く夫婦関係-』ナカニシヤ出版
 日経BPムック 2004『ライトノベル完全読本』日経BP
 高橋しん 2000-2001『最終兵器彼女①~⑦』小学館
 上田麻由子 2011 白鳥座α星の瞳-『涼宮ハルヒの憂鬱』と〈少女〉のなかの少女-『ユリイカ7月臨時増刊号〈第43巻第7号〉』総特集☆涼宮ハルヒのユリイカ!』青土社 97-105頁
 上野千鶴子 2007 腐女子とはだれか?-サブカルのジェンダー分析のための覚え書き-『ユリイカ6月臨時増刊号〈第39巻第7号〉』総特集 腐女子マンガ大系』青土社 30-36頁
 宇野常寛 2008『ゼロ年代の想像力』早川書房
 全国出版協会・出版科学研究所 2011『2011年版出版指標年報』社団法人全国出版協会・出版科学研究所
 [涼宮ハルヒシリーズ]
 谷川 流 2003a『涼宮ハルヒの憂鬱』角川スニーカー文庫
 谷川 流 2003b『涼宮ハルヒの溜息』角川スニーカー文庫

谷川 流 2004 a 『涼宮ハルヒの退屈』 角川スニーカー文庫

谷川 流 2004 b 『涼宮ハルヒの消失』 角川スニーカー文庫

谷川 流 2004 c 『涼宮ハルヒの暴走』 角川スニーカー文庫

谷川 流 2005 a 『涼宮ハルヒの動揺』 角川スニーカー文庫

谷川 流 2005 b 『涼宮ハルヒの陰謀』 角川スニーカー文庫

谷川 流 2006 『涼宮ハルヒの憤慨』 角川スニーカー文庫

谷川 流 2007 『涼宮ハルヒの分裂』 角川スニーカー文庫

谷川 流 2011 a 『涼宮ハルヒの驚愕 (前)』 角川スニーカー文庫

谷川 流 2011 b 『涼宮ハルヒの驚愕 (後)』 角川スニーカー文庫

(2011年11月9日受理)